

松江赤十字病院所蔵古医書と蘭医ポンペの紹介

森脇 美智子

I. はじめに

幕末(19世紀)の松江藩においても医学教育の歴史は古く、漢方医学、南蛮医学、蘭方医学がそれぞれに受け入れられ、影響をしながら発展して行った。

当院が所蔵している古医書については、以前に「医学図書館」雑誌で紹介しているがその後、マスコミや学識者らによってその価値が認められるようになってきた。

特にペン字書きの「Pompe (百朋)」と書かれた書籍については、自筆書の真偽を確かめたく専門家の鑑定が望まれていた。

この度、ライデン大学(オランダ)の教授らによる調査を受ける機会を得たのでその歴史を辿りながら、松江藩における医学教育を含めて当院の古医書と長崎におけるポンペの業績を紹介する。

II. 松江藩の医学教育

松江藩における医学教育の始まりは、7代藩主松平治郷(茶人不昧公)の時代からとされ、「存濟館」の開設によって漢方医学教育が開始された。「存濟館」が1870(明治3)年に廃止されるまでの64年間に、当地の最高学府であり医師取締りの総元締であった。1841(天保12)年には学館内に文庫を建築し、藩蔵の医書を納めた。

これらの医学書が当院図書室に保存されていることが1974(昭和49)年に松江市内の開業医だった故米田正治先生によって判明し、現在も保管されているのである。

松江藩における蘭学は、9代松平齋貴公(1815~1863年)の奨励擁護によるところが大きい。この間、他国においては和歌山の華岡青洲が全身麻酔によって乳癌の摘出術に成功し、長崎ではシーボルトが西洋医学の伝習所『鳴滝塾』を始め(1824年)、また大阪においては、緒方洪庵が『適塾』を開設(1838年)するなど漢方から西洋医学に進展して行く風潮がみられるようになった。向学に燃える青年学生はだんだんと他国へ遊学するようになり西洋医学の知識を吸収して行った。また、9代藩主齋貴公は西洋文物の蒐集家として有名であり、江戸藩邸において時計、電信機、写真機などの他、多数の洋書(辞典、医学書)を購入している。

御用頭書(文久3)によると「和蘭字彙(江戸ハルマ)を金8両、翻訳書数冊を金30両で買入れる」とあることから、かなり支出していることがわかる。

これら多くの書籍は藩主の病歿後、藩邸内の洋学教授で「適塾」に学んだ布野雲平に引渡された。その後、1867(慶応3)年には10代藩主松平定安公が「修道館」と称して蘭医学校を開設し、西洋医学教育を始めた。この洋学所は、英学所と蘭学所からなり、出雲出身の布野雲平は国許へ呼び戻された。

1865(慶応元)年には、医学修業として諸国に

MORIWAKI Michiko

松江赤十字病院 企画調整課

mrwk-lib@web-sanin.co.jp

派遣され、長崎病院へ北尾漸一郎、田代澗平、多納泰庵、太田豊蔵らが修業のため馳せられている。彼らは精得館および長崎病院において医学教育を受け、修道館洋学校ではこのカリキュラムに従った素晴らしい構想のもとで始まったのである。また、医学教科書は、すべて原書の文法書や究理書であり、決まった教科書はなく、各生徒の所持する書籍や学校所有の蘭書によって教授されていたらしい。

松江藩は、廃藩置県によって松江県と変わり、明治5年には藩校修道館も閉校されたが明治9年に現在の松江赤十字病院新館に位置する場所に「患者を診療する傍ら、医学生の養成を行うこと」を目的に公立松江病院が開設され、藩校時代の書籍、器械類を借り受けて医学生の養成が行われた。その後、公立病院は松江病院と改称、そして西洋医学校となったがその間に187名の医学生の入学が記録されている。そして、昭和11年4月に日本赤十字社に移管され、現在の松江赤十字病院に至っている(図1)。

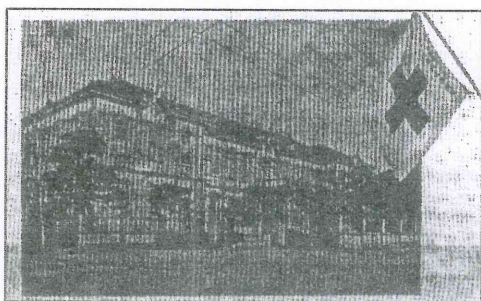


図1 昭和11年日本赤十字社島根支部病院
(創立当時)

Ⅲ. 所蔵古医書

このような変遷の中で藩校時代からの書籍は引き継がれ、約500冊の貴重な資料が残されていたのである。この多種の古医書は、市内開業医の故米田正治先生によって発見され、分類目録が昭和51年に作成された。その資料をもとに現存する古医書と照合しながら、当院所蔵

古医書目録を改訂することができた。

古医書は5分類に分けられるが、それらの一部を紹介する。

①中国人の書いた漢方医書

「千金方」 孫思邈(唐)

「東垣十書」 李東垣(元)

「本草綱目」 李時珍(1576:明)

②日本人の書いた漢方医書

「啓迪集」 曲直瀬道三(1689:慶安2)

「大和本草」 貝原益軒(1709:宝永6)

「物類品隲」 平賀源内(1762:宝暦13)

③蘭医学に関する古医書

「解体新書」 杉田玄白(1774:安永3)

「重訂解体新書」 大槻玄沢(1798:寛政10)

「舎密開宗」 宇田川榕庵(1830:天保元)

「ワートル:薬性論」 林洞海(1856:安政3)

④原書

「Operations of minor surgery」

〈小外科手術書 F.W. Sargent

(1867:慶応3)

「English grammar」 (英吉利文典)

(1867:慶応3)

「Algemeene geneesmiddelleer」

〈一般薬剤学 Pompe V. Meerdorvoort

(1863:文久2)

⑤幕末・明治に亘る日本人の著書及び翻訳書

「ボンベ眼科摘要」

倉次元意 訳 (1866:慶応2)

「ストロメール外科医法」

佐藤尚中 訳 (1865:慶応元)

「ハラタマ増訂化学訓蒙」

石黒忠憲 訳 (1873:明治6)

これらの中には、平賀源内、貝原益軒や杉田玄白など耳にしたことがある人名や書籍もあり、特に親しみを覚えるのではないだろうか。

大槻玄沢による「重訂解体新書」は、「解体新書」の改訂版とされているが原本であるキュルムスの原書を熟読、考察をして更に注釈を入れ、玄沢自ら解剖を実証して10年の歳月をか

れ、玄沢自ら解剖を実証して 10 年の歳月をかけ 13 巻を完成させた。

また、エレキテルや寒暖計などの発明で多方面に活躍した平賀源内は薬物学者でもあり、日本で初めて湯島において博覧会(薬品会)を 3 回開催している。これらの出品物に関する博物書が「物類品隲」である。数奇な人生を送ったが今でも独創的なアイデアに対しては注目される人である。

「舎密開宗」を訳した宇田川榕庵(津山藩医)は、諸々の化学書の記述を採り入れ、基礎とする理論化学から温泉成分などの分析化学まで詳細にまた、彼独自の見解も含めて完成させた日本最初の本格的化学書である。舎密とは、オランダ語で化学を表す *chemie* の音訳であり、彼はこの言葉を創案した。

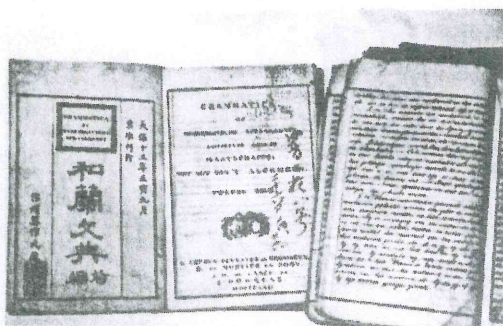


図2 古医書(和蘭文典)



図3 古医書(物類品隲)

ワートル薬性論(巻1~18)を訳した林洞海は、

小倉藩の典医であり、後に宇田川榕庵に蘭医学を学んだ。当時薬草として使用されていたオリーブを日本に初めてフランスから取り寄せて植樹した人でもある。原著の中で、*Pompe* と表書きされ、本文は流暢なペン字で「*Desima*」と記されている書籍を含めて 4 種(6 冊)のポンペの書物も注目される(図1~3)。

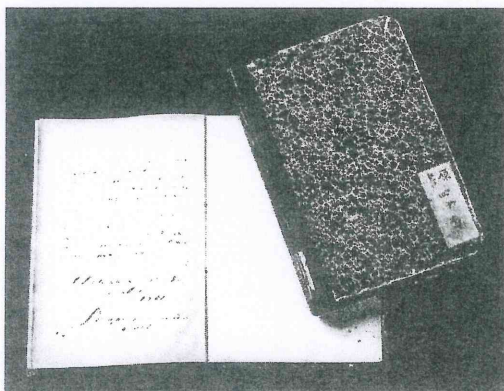


図4 *Desima* における議事録

IV. 長崎とオランダ交流

鎖国という社会の中で西洋医学がどのように流入し、展開してきたのだろうか。社会の動きに大きな影響を受けた長崎を歴史的に辿ってみたい。

1600(慶長5)年4月19日、豊後国(大分県)の沖に1隻のオランダ船が漂着した。オランダ東インド航路開拓船団の5隻中の1隻、デ・リーフデ号である。1598年にロッテルダムを出港したがこの船だけが漂流し、日本に到着することができた。これが我国に来航した最初のオランダ船である。出港時110名の乗組員はわずか24名と記録されているがその中のウィリアム・アダムス(後の三浦按針)とヤン・ヨーステンの2人はその後、徳川家康の外交顧問として活躍し、平戸のオランダやイギリスの商館に尽力した。オランダ商館は、1609(慶長14)年に平戸に設置され、イギリス商館もそれに続いたが赤字続きでわずか10年で閉館し、日本の貿易から撤退した。

キリスト教布教禁止とポルトガル人を隔離するために人工島「出島」が造られたが、ポルトガル人の追放によって長崎港は唐船貿易のみとなり急激に衰退した。その為、幕府は平戸にあったオランダ商館を出島に移す方針を立てた。1823年(文政6)には、オランダ商館医としてシーボルト(独人)が来日し、近代の西洋医学を長崎から広めて行った。

シーボルトは、「鳴滝塾」を開き、その門下生として高橋長英、伊東玄朴他、数10名が学んだとされている。彼の帰国後(シーボルト事件)26年を経た1855年(安政2)、日蘭和親条約が結ばれ出島の出入は自由となった。開国(1859年)までの間、出島は西欧の文化や新しい知識をもたらす唯一の窓口となった。

V. ポンペによる医学教育

ポンペ・ファン・メーデルフォールト(1829~1908年)は、1857年(安政4)9月に第二次海軍伝習教員団として来日した海軍軍医である。

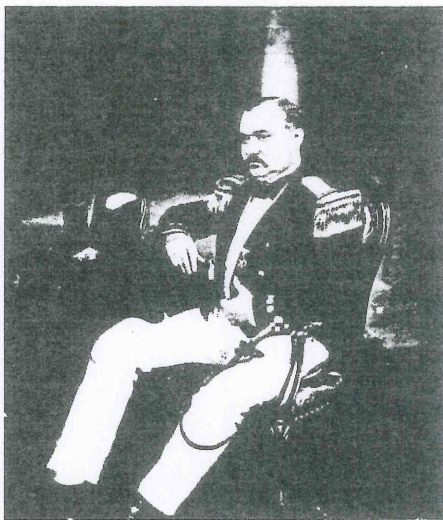


図5 ポンペ像(長崎大学図書館医学部分館所蔵)

弱冠28歳で初代教師として幕府の公式要請で派遣されたポンペは、幕医の松本良順らの協力を得て同年11月に西洋医学伝習所を開始し

た。これが後の長崎大学医学部の前身である。

ポンペは、解剖学、生理学、病理学、組織学そして内科学、外科学、産科学など幅広い医学の他に物理学、化学など自然科学も教え、この長崎で5年間全力で医学の伝習にあたった。医学の基礎知識もなく言葉の通じない日本人学生に根気強く、そして分かり易く教えることは大変な苦勞であっただろう。協力者である松本良順、佐藤尚中は昼間の講義を夜にもう一度、復講して学生の理解を図っていたという。

ポンペは同年、12月末に長崎に天然痘が流行し始めたことから公開種痘を始め、次いで猛威をふるったコレラを鎮静した。これらに対して、長崎の人々は次第に信頼と尊敬を寄せるようになった。

また、1859年(安政6)年9月には日本初の人体解剖実験を行っている。ポンペはその後も死体解剖を行っているがその中には、シーボルトの娘、お稲も混じっていたようである。

その後、海軍伝習の一部として始まった医学伝習所は医学所となり、1861年(文久元)9月に124床を持つ附属の「療生所」(精得館)が完成した。これは、日本で最初の西洋式附属病院である。

ポンペは、多くの日本人医学生に対して養生所で系統的な講義を行い、ベットサイドでの実習も教えた。その門下生らによって西洋医学は広められ、ポンペは近代西洋医学教育の父と称されている。

IV. 調査による新たな展開

当院所蔵の書籍がポンペの自筆書か否かを真偽していただく機会を得て、ポンペゆかりの長崎大学医学部の相川忠臣教授を紹介された。

平成12年11月に開催される日蘭400年記念行事に出席されるライデン大学医史学の第一人者であるハルメン・ポイケルス教授の来日を待って当地、松江へ調査に来て下さることになったのである。

ハルメン・ポイケルス教授を中心にデュルツブルグ大学(ドイツ)のアンドレアス・メッテンライター医師、そして相川教授によって自筆かどうか、それぞれの専門分野から鑑定していただいた。

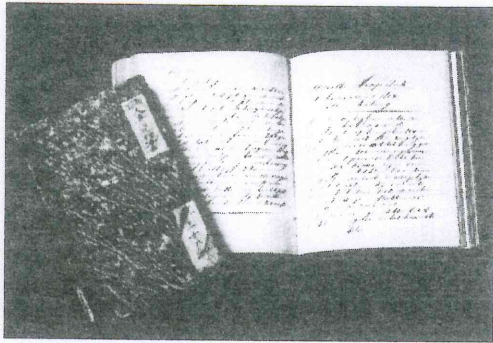


図6 ポンペ議事録(人身弱理書)

その結果、ポイケルス教授が持参されたポンペの書簡の写しと照合したところ、書体の特徴から自筆ではないと判断された。これらは、ポンペに学んだ日本人学生2、3人が講義ノートを書き写したものとされる書籍であった。理由として講義録の中には日本人がよく間違えるスペルがあること。講義録のほとんどが日本製の紙が使用されていること。当時ヨーロッパで使用されていたインクとは異なり、黒に近い色で書かれていることが挙げられる。また、比べると書体に違いがあり、特に『D』の書き方に特徴がそれぞれあり、同一人物が書いたものではないことがわかった。紙についても講義録の中に数ページ西洋紙が使われていることも指摘され、あらためてこれら書物の編纂過程に興味を抱いた。

ポイケルス教授は、「ポンペの講義録で日本語訳は多く残っているが当時の日本人学生による翻訳は未熟で内容が分かりにくいものである。一方、日本人によるオランダ語で書かれた講義録は少なく、また完全な形で残っていることも非常に珍しい。講義の内容を正確に知ることが出来ると思われる。自筆書でないとは言え、史

料的価値が下がるわけでない。ポンペが日本人学生にどのような進め方をしたのか大変興味深い」と話され、相川教授も精査することによって当時の講義内容がわかるので、時間をかけて調べたい」と期待を寄せられた。



図7 新聞記事

ポンペの講義録で臨床医学に関する資料は多いが化学など基礎医学が残っているケースは珍しいという。結果的には、「自筆書」を期待していた関係者にとっては残念であったが、別の意味で高い評価を得ることが出来た。

Ⅶ. おわりに

「古医書」も医学分野以外でみるといろいろな見方ができでおもしろい。裏表紙に『松江・太田』と署名されている古医書も見つかった。松江藩から長崎に医学修業のため派せられたと記録されている太田豊蔵ではないかと思われる。そこからその人物像や動向を解明してみたいという気持ちをこのポンペ講義録から起させてもらったように思う。また、謎解きとは大げさであるが、1冊の中に数個の所蔵印が押されていることを見ても多くの人の手に渡り、「今」ここに保管されていること、そして処々に書き込まれた持ち主のメモや走り書きにも何かしらロマンを感じる。

つと思う。今後、その価値を認識するための研鑽が必要であり、大切な財産として保存していかなければならないとあらためて感じた。

多忙なスケジュールの中、2日間に亘って意欲的に調査をして下さった3名の先生に感謝すると共に今後、これらの講義録が温故知新の一つとなることを願う。

現在、この講義録はポイケルス教授が研究作業を進めておられ、この成果を日蘭学会において発表される予定である。

注：この度、所蔵古医書は保存の充実と資料公開のために島根県立図書館へ寄託することになりました。

参考文献

- 1) 森脇美智子：松江赤十字病院所蔵古医書の紹介と整理の現状。医学図書館 1991;38(4)：398-402.
- 2) 米田正治。島根県医学史覚書。松江文庫；1976.
- 3) 桃 裕行：松江藩と洋学の研究—桃。裕行著作集6。思文閣出版；1989.
- 4) 国重憲：松江赤十字病院沿革史。日本病院協会雑誌 1969；771—776.
- 5) 梶谷光弘：『日本教育史資料』所収—「旧松江藩医学校」の記述検討（前編）—藩医の登用からみた医学教授山本逸記の評価を中心として：島根大学教育学部附属中学校研究紀要 1993；35号：95-124.
- 6) 出島の誕生。参考[2001-4-23] URL:<http://www.Geocities.co.jp/SilkRoad/2765/decima/tj010.htm>
- 7) 近世薬学の導入期1。ポンペ、ハラタマなどオランダ医師薬剤師の渡来。参考[2001-4-23] URL:<http://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/history/history5/history5.html>
- 8) 吉良枝郎：日本の西洋医学の生い立ち—何蛮人渡来から明治維新まで。築地書館；2000